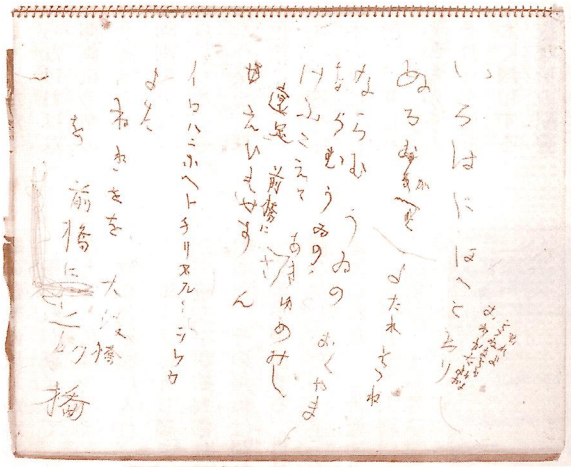
あかつき

大方あかつき館報
上林 暁文学のふるさと
第4号
2000年12月発行

入野の浜で（昭和33年8月）



左手で文字を書く練習をしたノート
（昭和41年頃）

特集 上林 暁

意志と善意の人 ―自らの惨苦を見すえた不撓の作家―

その3

「梨の花」の色紙

―苦難の文字の自然破形美―

小林亥一

書の世界でも他の造形芸術のように、破形の美を追い求めて制作する人々も少なくない。彼らは、整形を破り、何とかして個性を強烈に表現しようと努める。しかし、「自由を追うことからさえ自由になった」、破形の書に出会うことは稀である。

極端な破形とはいっても、暁文字の場合は、破形を希求する人々とはまったく逆で、文字の形を整えようと努めるのに、自然と崩れてまう破形なのである。すなわち暁文字の破形は、「自由を追う」ためどころか整形がままならない不自由によって生じた結果なのだ。

そのような暁文字に、常に「良寛の書の風韻」が漂っているわけではない。とき折その感を覚えるに過ぎないのだが、私には、良寛の書の破形と、暁文字の「自然の破形」との間に、何か相通ずる機微が潜んでいるように思われてならないのである。

自然破形の暁文字が、筆でお書きになれないものだろうかと思っていた。しかしそれは叶えられない願いだった。

土佐中村市の為松城址は公園になっていて、そこに上林暁文学碑の一基が建てられている。

四万十川の青き流れを忘れめや

という碑面の文字は、先生が御元気なときに書かれた、色紙の文字（本稿その2に掲載）を拡大して刻んだものである。この文学碑の写真を眺めていた私は、4B左手書きの暁文字を拡大してみてはどうか、と思った。ちょうど古文書を撮影して引き伸ばす必要があった折だったのである。

拡大する暁文字を、先生からいただいたお葉書の中で、「梨の花」の句の一葉を選んだのは、暁文字の特質（自然破形）がよく現れ、独自の雅趣に富む筆致だったからである。その一葉には

小林亥一クンより梨の枝をもらひて二句

梨の花これより淡きものなからん
三日月に梨の花咲けり淡きもの

と書かれていたが、詞書と二句目は、判読に苦しむほど文字も不ぞろいで、重なり合うところもあった。一句目を中心に接写レンズで撮り、色紙に収める文字の大きさを想定して、四ツ切に伸ばしてもらった。

拡大された「梨の花」の句は、文字の大きさといい、画線の太さといい、色紙にぴたり収まるように思われたが、これからの幾つかの行程を考えたとき、果してうまくできるかどうか、自信はなかった。色紙に仕上がるまでの行程は略述するが、ただ長年月広く一般に活用され、庶民の文化活動に大きな役割を果してきた、謄写版の印刷について触れておきたい。「梨の花」の色紙も、二十数年前、新しく開発された謄写版の印刷機によって作ることができたのである。

謄写版は、辞典には次のように説明されている。

「軽便な印刷機の一種。蠟引きの原紙を鑢にあてがい、これに鉄筆で書画を書いて蠟を落してすかしを作り、このすかしを通して印刷インクをにじみ出させて印刷する。ガリ版・鉄筆版・孔版ともいう。」

この鉄筆で一字一字、鑢板上の蠟原紙に手書きする方法は、恐らく一世紀近く行われてきたであ

大方あかつき館
〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222

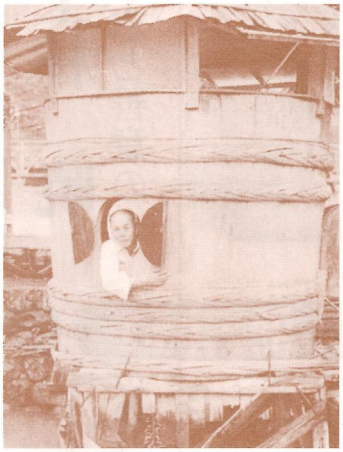
ろう。鉄筆で鑢板上の蠟原紙に書くとき、ガリ、ガリと音を発するところから、ガリ版と一般にいわれていた。現在はまだこのガリ、ガリ音を懐かしむ人々は多いのである。いまから二十数年前、新しく電動の謄写印刷機が開発された。このファックス（現在使用されている遠距離電送通信と同名だが、まったく別物）は、当時画期的な機器だった。鉄筆で書く必要もなく、原稿をセットすれば、電動によって原稿そのままが蠟原紙に鮮明にカッテングされた。このファックスが現れなかったら、私は「梨の花」の色紙を作ろうとは思わなかっただろう。

ファックスにセットする原稿（梨の花の句）を、どのようにして作成したかを述べるが、ゼロックスがまだ普及していなかった当時、回りくどい方法によらなければならなかった。四ツ切に伸した印画紙の梨の花の句を、ヒシロコピーという機器で薄い紙に写し変えるのは、厚味の印画紙ではファックスにセットできないからだった。そのセットの前にもう一つ重要な作業を、慎重に行わなければならない。色紙としての形が整うように、字配りを考えて、最終原稿を作る作業だ。それは、薄手の紙にコピーされた句を、上五の「梨の花」、中七の「これより淡き」、下五の「ものなからん」の三つの部分に切り取り、それらを色紙大の薄手の別紙に、もっともよく調和するように張り込むのである。奇抜な形の配置を避け、天地左右の間隔を考えて張り込むことにした。落款（らっかん）の「暁」を貼り終えて、しばらく眺め入った。

その最終原稿は精度の高いファックスによって、「梨の花」の句は、鮮明に孔版原紙にカッテングされていた。私は注意深く原紙をファックスから取り外し、一枚刷りの手刷り印刷機に移した。いよいよ試し刷りである。慎重に刷った一枚を見たとき、快哉を叫びそうになった。予想を越えたできばえではないか。一息してから色紙を取り出し、もう一度トンボを正確に合わせ、インクの濃度を加減してゆっくりと刷った。心もち薄めに十枚を刷った。

私は、刷り上がった色紙を眺めながら、「落ち着け、落ち着け」、と自分にいい聞かせて、たばこを吸い始めた。これからの仕上げが肝心なのだ。薄目に刷られた画線に墨を入れる作業を慎重に行わないと、台なしになってしまうからである。一服の後、墨の濃さ、筆の穂先の具合を加減して、最終の作業に取りかかった。

墨入れが終了して、純白の色紙を前にしたとき、私は少時ぼんやりしていた。その一枚を色紙額に入れ、壁に懸けて眺め入った。暁文字は光り輝き、まぶしいようだった。暁文字が拡大されて色紙の上に印せられると、その画線は躍動し、独特な巧まない雅趣が現前する。自然の破形が示す不思議な美しさだ。一字一字苦痛に耐えて書き進められた、「苦難の書」とは思われない。



高知県物部ダム樽の家で
（昭和33年8月）

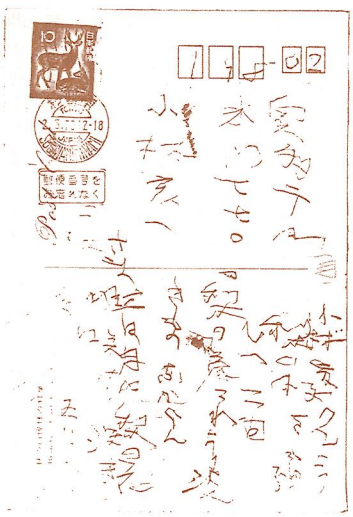
梨の花の二句が書かれたお葉書は、私がいただいたものの中で、もっとも辛苦なさった一葉ではあるまいか。前述の御本の署名の比ではない。私は、この一葉を拝見するたびに、感動と共に悲愴の感に打たれてしまうのだ。そのお葉書には、幾つかの文字から左の方へ、十数本の極細の線が不規則に走っている。それらの線は、先生の運筆がいかに困難を極めたかを物語っている。これを書かれたときは、お体の位置（向き）が不安定だったのか、あるいは左手が疲れていらっしゃったのか、運筆は甚しく乱れ、不要な力が指に加わり、その余分な力が4Bを左へ走らせる結果となったのであろう。渾身の力をこめて4Bを動かしておいでになる、上林先生のお姿が髣髴としてくる。

そのお葉書にはまた、梨の花の文字の脇に、小豆粒大の薄茶色の染みがついている。それはケーキか何かがこぼれてできたもので、4Bを持たれる前に、おやつを召し上がったのかもしれない。

先生が、食事やおやつを召し上がるときは、睦子さんが、食べものを小さくして、スプーンでお口へ入れて上げるのだが、その様子は、母親が病床の幼な子を養なっている感じだった。ときには極く少量がこぼれ落ちたりもして。このようなお葉書の句が、色紙として形を成したばかりか、予期したよりも好結果となったことを、先生に感謝し、しみじみとよろこばずにはいられなかった。たとえその文字が上林先生の肉筆でなかったとしても、また、拡大されたものであったにせよ、色紙という形で遺るのは、意義があるかもしれない。そう思ってはみたものの、上林先生にお見せするのは、やはりためらわれたのである。差し出がましい所行（しょぎょう）とおっしゃるかもしれないし、仰々しいとお感じになりはしないか、などと複雑な気持ちで、一人色紙に見入っていた。種々さまざまな思いが浮かんでくるのを、興がったりもしながら。

ものを拡大することによって、原形には見られなかった美しさを実感することがある。例えば、陶磁器など裏側にさげなく描かれた模様など、拡大鏡で眺めたり、拡大写真で観たりするときだが、暁文字は拡大によって、独自の破形美がはっきりしてくるように思われる。

以下次号に続く。



小林亥一氏が見舞いに贈った"梨の花"のお礼を左手で書いた「はがき」。
（昭和48年5月2日付）

感動の講演・上林暁と青年作曲家

—平成12年度第4講座　上林暁文学講座を聞いて—

宮川昭男

十一月二十六日の園田女子大学吉村稠教授の講演は、本年度文学講座の掉尾を飾るにふさわしい、内容豊かで感銘深いものであった。

現在の小説も、ある意味では大半が「私小説」的ではないかという、柳美里の、わが子誕生の克明な記録を紹介しながらのお話や、三原村出身の写真家野町数嘉の写真集『SAHARA』、星野道夫の動物写真を見せながらの「モチーフと作品の世界」の話なども興味深いものだったが、なんといっても青年作曲家・山田泉と上林さんの交流の話が感動的であった。

昨年四十六歳で急逝した山田泉は一九九二年に芥川作曲賞を受賞し、将来を嘱望されていた作曲家であった。上林さんとの交流は、山田が東京芸術大学受験を目指していた高校生の時、読者である山田が病床の作家上林さんに手紙を書いたことに始まる。次は、その何回目かの手紙の一部である。

「……今日、芸大の入試の発表がございまして、作曲科に合格することが出来ました。先生の芸術的、生活的厳しさを学んで私も精進していきたいと思います。

合格したら行こうと思っていました入野の松原へ再遊し、受験勉強の疲れを直し、入学式を迎えたいと思います。……」

昭和四十三年三月二十日付、山田十八歳の時のものである。これに対して、六十八歳で半身不髄の作家上林さんは、すぐにペンを執っている。

「芸大パス、おめでとう。あなたはパスするだろうと予想していました。

入野へ行かれるおもむき、ぼくの生家（母と妹がいる）へ立ち寄ることをおすすめします。

（松原から十五分、大方町下田ノ口）」

なんとあたたかい、真心のこもった手紙ではないか。幼児が書いたような、たどたどしい字であるが、一字一字左手で時間をかけて書いたのであろう。しかも、三月二十一日付、着いたその日に書かれているのである。このような山田宛の上林さんの葉書が十枚も残っているという。

山田は、上林さんに手紙を出してから数日後に、実際に入野松原を再訪している。死の二年前、吉村教授に山田が語ったという次の言葉にも心打たれる。

「上林さんの芸術との向きあい方、創作という作業への執念、そして、なにりもそこに至るまでの過程を自分は辿りたいのです。」

最後に、吉村教授は次のようにしめくくられた。

「山田泉のように、上林さんから生きる勇気を与えられ、はげまされてきた読者は日本各地にいるでしょう。大方からも、そのような全国のいろいろな人々に届くような発信をしてほしいし、二年後となった生誕百周年には、ぜひそのような全国版上林暁の取り組みを目指してほしいと思います。私も、できるかぎりお手伝いをさせていただきますので。」

この度の吉村教授の講演を、上林暁を生んだ地元大方町としてしっかりと受け止め、上林暁生誕百周年事業も大方の活性化につながる意義深いものにしていきたいものだと思う。

生涯学習係からのお知らせ

1.生涯学習事業

(1) 青少年健全育成事業

1月5日(金)　新春かきぞめ大会(対象/小・中学生)
1月13(土)・14日(日)　わんぱくスキー教室(対象/小学校6年生)

(2) 家庭教育講座

1月20日(土)　入野小学校 講師/青木浩(若草園園長)
1月31日(水)　大方あかつき館 講師/杉本園子(医療法人精菓園)
2月 7日(水)　大方あかつき館 講師/未定

(3) 成人式

1月3日(水)　ふるさと総合センター

2.生涯スポーツ事業

(1) 青少年健全育成事業

2月　大方町民マラソン大会
　　市町村対抗駅伝大会
　　あしずり駅伝大会

3月　大方町民駅伝大会兼四国の道駅伝大会
　　ジュニアバスケットボール大会
　　バードランド周回駅伝

8月に開催したワールドクッキング
地域の外国の方と触れ合いながら、親子で世界の料理に挑戦しました。

文化振興係からのお知らせ

第38回・大方の秋まつり盛大に開催

日時/平成12年11月11日(土)～12日(日)
場所/ふるさと総合センター

〝心のふるさとをとりもどそう〟を開催テーマに、展示部門、お祭り広場の出店、郷土芸能などが繰り広げられ、たくさんの人達で賑わいました。

1.図書館より

日　　時	内　　容	場　　所
平成13年1月28日(日)	市原隣一郎講演会	大方あかつき館 レクチャーホール
平成13年3月25日(日)	人形劇(manoj) 川尻麻美夏	大方あかつき館 レクチャーホール
平成12年12月3日 ～平成13年1月31日	感想絵コンテスト (募集・12/3～1/7)(展示・1/10～1/31)	入選作品展示(1/10～31) 大方あかつき館 町民ギャラリー
毎日曜日(とっても日曜日)	絵本、紙芝居、ビデオ	図書館子ども室 レクチャーホール

★感想絵コンテストの詳しいことは、大方あかつき館(図書館の係)にお問合せ下さい。

2.文学館より

企画展

【上林暁―生原稿・色紙ほか】開催中
平成12年10月1日～平成13年1月31日まで

入館者の声を紹介します。(備え付けの入館記帳より)

＊久しぶりの文学の香り高い作品に楽しい一時でした。(坂出市の方)
＊先生の絶筆となった原稿に熱い情を読む。(中村市の方)
＊上林先生、東京天沼でお逢いし、お別れし、また、ここでお逢いできました。うれしいです。(東京の方)
＊今度来る時、銀座に残る改造社の写真撮ってきてあげる。(埼玉の方)
＊建物がなかなか立派です。展示品は少々少ないかな？(高知市の方)
＊私は、病の身です。とても力づけられました。(高知市の方)
＊いい文学の館で感銘しました。上林さんは幸福。(高知市の方)

大方あかつき館
〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222